

D-7

美術館内の鑑賞動線上における展示室境界部の視覚的要素が及ぼす影響  
 Influence of Visual Elements of Exhibition Room's Border Surface on Viewing Flow line in Museum

○赤間 結<sup>1</sup>, 橋本修<sup>2</sup>

\*Yui Akama<sup>1</sup>, Osamu Hashimoto<sup>2</sup>

The purpose of this study is to clarify, from the perspective of the light environment and the spatial structure, what an art museum should be not only for the exhibits, but also for the exhibits and the viewers. As a background to this, there has been a shift in a nature of art museums are organized in recent years, with attention being paid to the so-called “residency art museums” that focus on people. By investigating how the light environment and the spatial structure in the art museums is, hypothesized that the continuity of light contrast affects the exhibits seen and viewers. The result of experiment showed that the connecting part of exhibition space was affected by the impression that the viewer feels. This paper showed that it is important to consider the continuity of the light environment throughout art museum in order to consider how the art museum should be.

1. はじめに

美術館建築は、1つの展示会に対し複数の作品が展示されているため、複数の作品と複数の展示室の構成の一連から成り立つと考えられる。これらは建築的な空間の構成(設計者による)と照明方法や内装などによる展示方法(学芸員や作者による)から生まれる。

よって、展示室の空間構成、照明環境と鑑賞者が感じる空間に対する印象の関係性を明らかにすることが美術館学芸員が空間を作り上げること、また、鑑賞者が美術館を訪れた際の展示品や展示空間の見方に役立つと考える。

これまでに、順路のわかりやすさと利用者満足度の高い最適解とされる展示空間を示したもの<sup>[1]</sup>や、仕上げのレイアウトや操作手法によって美術館全体を統合させる手法の特徴を検討している<sup>[2]</sup>例、展示品の見やすさについての感覚を指標にした照明設計ツールの構築に関する検討を行っている<sup>[3]</sup>例もある。しかし、現代の美術館における展示室の配置や空間構成、また、照明計画による美術館全体の総合的な印象評価と物理的な関係性について研究された例はほとんどない。

そこで本研究では、空間構成や照明環境による印象から美術館を体系的に評価するための検討を行った。

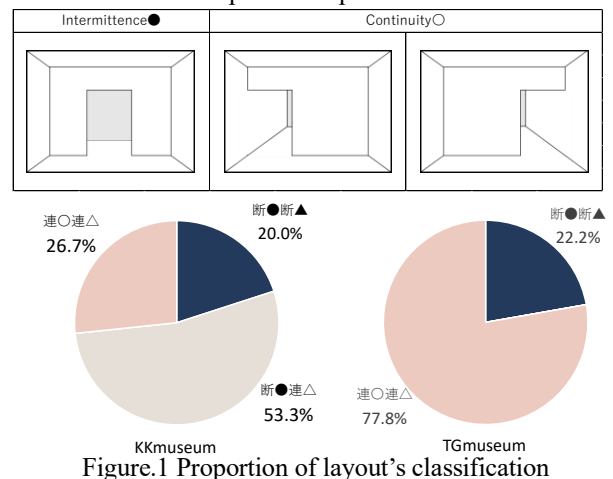
2. 美術館の展示室の境界部の空間構成と内装の抽出と分類分け

空間の構成方法として、段差などがなく壁、床、天井の面を連続させることでまとまりを捉えることができると考えた。そこで、空間構成面の連なりに着目し、接続する室同士が2つ以上の構成面の連なりをもつ場合を構成的に室を統合する「連続○」とし、統合面が1つ以下のものを「断続●」として抽出した(Table.1)。また、

空間構成同様に、内装に関しても2つ以上の構成面の内装が統合している「連続△」、1つ以下しか構成面の内装が統合していない「断続▲」として分類した。

また、今回調査を行った美術館における室境界部 24地点における空間構成と内装の「連続」「断続」の割合を Fig.1 に示す。TG 美術館では、境界部の構成と内装が統一され、展示全体でまとまりを持たせていた。また、KK 美術館では、内装を統一させ境界部を断続させることで空間1つ1つにテーマを持たせつつ、展示内容の一貫性があるような印象を受けた。さらに、どちらの美術館でも、空間構成や内装の変化に合わせて照明の色や明るさを変化させることで室の印象を変化させていることから、境界部では手前の部屋と奥の部屋の明るさ感が室境界部の壁面に見えるために、鑑賞者は明るさのコントラストを感じ、展示空間に入る前の状況が展示空間の印象に影響していることが示唆された。

Table.1 Continuity and intermittence of rooms made by spatial component



1: 日大理工・院(前期)・建築, 2: 日大理工・教員・建築

3. 美術館展示室の境界部の評価項目の抽出と境界部の空間における印象評価の変化についての検討

鑑賞者の体験を具体的に把握するため、東京都内2つの美術館で Fig.2 に示した地点で、印象を聞き、何を見てそう思ったか、その結果どんな気持ちになったかをインタビュー形式で調査した。被験者は各美術館 11 人の成人(20 代の男女)を対象とし、展示を体験してもらい、境界部を通った後の印象についても調査を行った。各美術館における記述内容についての結果を Fig.3 に示す。どちらの美術館も、境界部の印象に関する割合は同じような結果であるとわかった。展示室内での評価と異なり、室境界部では照明や空間構成を意識する傾向にあり、鑑賞者はこの2つの要因から印象を感じていると考える。展示室内へ移動後は、各美術館で若干割合が変化することがわかった。KK 美術館は作品が多かったため作品重視の回答、TG 美術館では照明の変化が多かったため、展示室内でよりコントラストを感じ、照明に関する内容が増えたと考えられる。

境界部での調査に関する回答を美術館ごとに評価構造図にまとめたものを Fig.4, 調査で得られた回答の

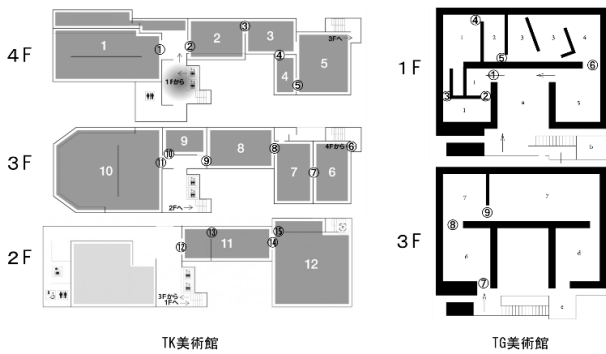


Figure.2 the map of observation points

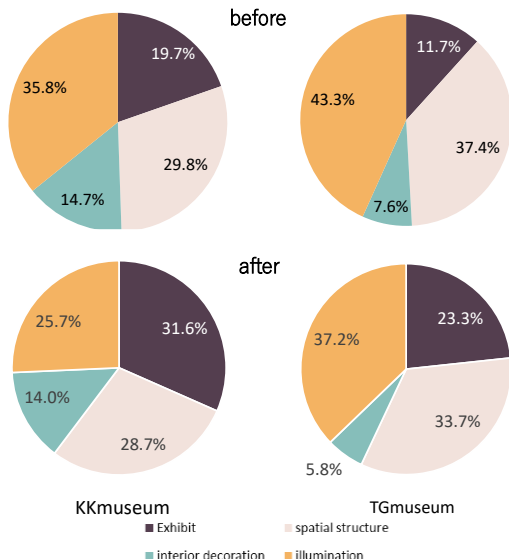


Figure.3 Proportion of answer contents

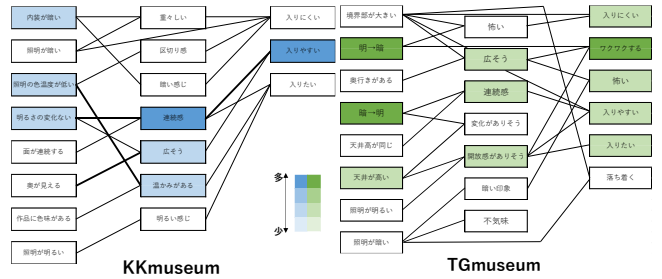


Figure.4 Evaluation structure diagram

Table.2 Impression evaluation words

入りづらい	入りやすい
暗い	明るい
興味が無い・ワクワクしない	興味がある・ワクワクする
切り替わり感	つながり感
閉鎖感	開放感
期待感がない	期待がある
狭そう	広そう

内、各地点の頻出率が 50%以上の回答とその語句と対になる語句から評価項目に適しているものを Table.2 に示す。境界部に関する評価は美術館ごとにそこまで差がない結果になった。主に空間を連続的に体験したことや、次の展示室への印象に関係する用語が多いこと、次の展示室や作品の印象を予測するような表現等が見受けられ、鑑賞者は、美術館内の展示空間を複数体験していくことで、個々では体験できない印象を受けていることが示唆された。また、TG 美術館では明るさのコントラストに関する回答が多く見られたことから、美術館ごとに明るさの変化の仕方が変わり、鑑賞者に影響を与えていると考えられる。

4. まとめ

実験から、展示室を連続的に体験することによって生まれる印象があり、鑑賞者は照明や空間構成に着目し展示室間を移動していると示された。個々の展示室を体験するだけでは得られない印象を得られ、美術館の評価を行うには、個々の展示室だけでなく連続的な体験を評価する必要があると考えられる。今後、美術館全体の評価をするには連続的な展示空間の照明計画の検討が重要になると示唆された。

5. 参考文献

[1] 仙田満, 篠直人, 矢田努, 鈴木裕実:「美術館展示室の建築計画的な研究 展示壁面の配置方法と利用者の評価について」, 日本建築学会計画系論文集, 第 517 号, pp.145-149, 1999 年 3 月

[2] 松島潤平, 乾谷翔, 村田涼, 安田幸一:「現代の美術館建築における室と仕上げのレイアウトによる空間の統合手法」, 日本建築学会計画系論文集, 第 85 巻, 第 767 号, 49-57, 2020 年 1 月

[3] 服部祐介:「美術館展示室の照明設計ツール」, 東京工業大学修士論文, 2006 年 7 月